

くさびら

泉鏡花作

全一章

御馳走には季春がまだ早いが、たゞ見るだけなら  
何時でも構はない。食料に成る成らないは別として、  
今頃の梅雨には種々の茸がよき／＼と野山に生え  
る。

野山に、よき／＼と言つて、あの形を想ふと、  
何となく滑稽けてきこえて、大分安直に扱ふやうだ  
けれども、飛んでもない事、あれでなか／＼凄味が  
ある。

先年、麹町の土手三番町の堀端寄に住んだ借家は、  
太い湿気で、遁出すやうに引越した事がある。一體  
三間ばかりの棟割長屋に、八疊も、京間で廣々とし  
て、柱に唐草彫の釘かくしなどがあらうと言ふ、書  
院づくりの一座敷を、無理に附着けて、屋賃をお邸  
なみにしたのであるから、天井は高いが、床は低い。

――大掃除の時に、床板を剥すと、下は水溜に

成つて居て、溢れたのがちよろ／＼と蜘蛛手に走つたのだから可恐い。此の邸… いや此の座敷へ茸が出た。

生えた …… など、尋常な事は言ふまい。

「出た」とおばけらしく話したい。五月雨のしと／＼とする時分、家内が朝の間、掃除をする時、縁のあかりで氣が着くと、疊のへりを横縦にすつと一列に並んで、小さい雨垂に足の生えたやうなもの、群り出たのを、黴にしては寸法が長し、と横に透すと、まあ、怪しからぬ、悉く茸であつた。細い針ほどな侏儒が、一つ／＼と、歩行き出しさうな氣勢がある。吃驚して、煮湯で雑巾を絞つて、よく拭つて、先づ退治た。が、暮方の掃除に視ると、同じやうに、ずらりと並んで揃つて出て居た。此が茸なればこそ、目もまはさずに、じつと堪へて私には話さずに秘して居た。私が臆病だからである。

何しろ梅雨あけ早々に其家は引越した。が、…

… 私はあると聞いて身ぶるびした。むかしは加州山中の温泉宿に、住居の大圍爐裡に、灰の中から、

笠のかこみ一尺ばかりの眞黒な茸が三本づゝ、續けて五日も生えた、と言ふのが、手近な三州奇談に出て居る。家族は一統、加持よ所禱よ、と青くなつて騒いだが、私に似ない其主人、膽が据つて聊かも騒がない。茸だから生えると言つて、むしつては捨て、むしつては捨てたので、やがて妖は留んで、一家に何事の觸りもなかつた。――鐵心銷怪。偉い！

……と其の編者は賞めて居る。私は笑はれても仕方がない。成程、其の八疊に轉寢をすると、とりとする下腹がチクリと疼んだ。針のやうな茸が洒落に突いたのであらうと思つて、もう一度身ぶるひすると同時に、何うやら其の茸が、一づゝ芥子ほどの目を剥いて、ペロりと舌を出して、店賃の安値いのを嘲笑つて居たやうで、少々癩だが、しかし可笑い。可笑いが、氣味が悪い。

能の狂言に「茸」がある。――山家あたりに住むものが、邸中、座敷まで大な茸が幾つともなく出て崇るのに困じて、大峰葛城茸を渡つた知音の山伏を頼んで來ると、「それ、山伏と言つば山伏なり、何と殊勝なか。」と先づ威張つて、兜巾

を傾、いらたかの數珠を揉みに揉んで、祈るほどに、祈るほどに、祈れば祈るほど、大な茸の、あれ／＼思ひなしか、目鼻手足のやうなものゝ見えるのが、おびたゞしく出て、したゝか仇をなし、引着いて惱ませる。「いで、此上は、茄子の印を結んで掛け、いろはにほへとゝ祈るならば、などか奇特のなかるべき、などが、ちりぬるをわかんなれ。」と祈る時、傘を半びらきにした、中にも毒々しい魔形なのが、二の松へ這つて出る。此にぎよつとしながら、いま一祈り祈りかけると、その茸、傘を開いてスツクと立ち、躍りかゝつて、「ゆるせ、」と逃げ廻る山伏を、「取つて噛まう、取つて噛まう。」と脅すのである。――彼等を輕んずる人間に封して、茸のために氣を吐いたものである。臆病な癖に私はすきだ。

そこで茸の扮装は、縞の着附、括袴、腰帶、脚絆で、見徳、嘯吹、上髯の面を被る。その傘の逸もつが、鬼頭巾で武惡の面ださうである。岩茸、灰茸、鳶茸、坊主茸の類であらう。いづれも、塗笠、檜笠、菅笠、坊主笠を被つて出ると言ふ。……此の狂

言はまだ見ないが、古寺の廣室の雨、孤屋の霧のた  
そがれを舞臺にして、ずらりと此の形で並んだら、  
並んだだけで、おもしろからう。・・・中に、  
紅絹の切に、白い顔の目ばかり出して袂折笠の姿が  
ある。紅茸らしい。あの露を帯びた色は、幽に光を  
さへ放つて、たとへば、妖女の艶がある。庭に植ゑ  
たいくらゐに思ふ。食べるのぢやあないから　ー  
茸よ、取つて噛むなよ、取つて噛むなよ。……

【完】